

## キューバ式離婚事情

雑誌『女性たち』\*第 538 号、2011 年 5 月 12-18 日号。

サラ・マス

\*キューバ女性連盟(FMC)機関誌  
(安井 佐紀訳)

意思の疎通の不足、嫉妬、暴力、愛の冷却、幻滅、同居の難しさ、新しい愛、和解できない相違点、プライバシーや住居の不足、あるいは単なる疎遠が、今日、少なからずのキューバ人の男女がパートナー生活を終える理由の長いリストに並んでいる。それは、法的な離婚であれ（もし正式な結婚であるならば）、あるいはフリーな結婚の場合の関係の解消であれ、同じである。

確かなことは、このカリブの島、キューバでは、人びとは、簡単にまた頻繁に、結ばれ、別れるということである。そこでは、現在のキューバの家族の傾向の一部として、いろいろなパートナーと一緒に生活することを何度も繰り返すこと、合意による結婚や、またその関係の解消や、法的離婚の増加が見られる。



法的でない関係の解消を数値で示すことは、不可能である。しかし、もしそれらの関係の解消を考慮すると、公式な統計が示す「キューバ式離婚」の数よりも、はるかに多いものとなるだろうと推測される。つまり、「キューバ国家統計局人口と発展研究センター」のデータによると、確定離婚判決総数は、2009 年には 35,034 件、住民 1,000 人につき 3.1% の割合である。

最初の法律の先例は、1869 年までさかのぼる。つまり、(独立戦争中)の「戦うキューバ共和国」の「離婚法」であったが、離婚は、家父長的な文化が強い社会ではすぐには受け入れられなかった。というのは、当時のキューバ社会は、一夫一婦制が重視され、家庭における男性首長が中心とされていたからである。その社会では、このテーマについての研究が示しているように、結婚は正しく、離婚は、危機的な状況における最後の手段であった。従って、離婚は、社会的汚名の危険を伴っていた。「離婚した女性」は、悪く見られ、「尻軽な女性」とさえ考えられた。一方、結婚は、少なからずの場合、幸福を得るための過程あるいは職業を意味した。

離婚法は、1917 年には大統領の署名により正式なものとなったが、その後何年もの間、離婚率は、最低の数値にとどまった。そして 1963 年になって、まだ低い数値ではあるが、

初めて離婚数が、住民 1000 人につき 1 件を超えた。1993 年にはピークに達して、住民 1000 人につき 6 件、そしてここ数年は高い数値を保ちながらも、3 件から 3.4 件の間で安定している。

「データもまた、離婚—婚姻関係において、異常な増加を示していて、1970 年には 100 組の婚姻あたり 22 件余の離婚がありました。1981 年には 39 件、2009 年には 64 件と増えています。つまり、婚姻 100 組あたりの離婚の比率は、1970 年から 2009 年の間にほぼ 3 倍に増えています」と、ハバナ大学人口統計学研究センター(CEDEM)のマリア・エレナ・ベニテス研究員は指摘する。

キューバの離婚率は、ラテンアメリカ・カリブ海諸国の中で最も高く、パートナー関係の解消は、引き続き論議を呼ぶテーマとなっている。つまり、それは、家庭の不安定さと危機を表しているという人もいるし、不満足な結婚を終わらせる可能性となるという人もいる。「離婚は、一緒に生活でき、もっと幸せになれる人と出会うための新たな機会となることもまた、認めなければなりません。悪い夫婦関係は、夫婦にとっても、子供たちにとっても、これ以上悪いことはありません。時と共に、別れた夫婦と子供達すべては、離婚は、意味を失っていた関係からして、より少なく悪いことであったと理解します」と、ベニテス研究員は言う。

45 歳のハバナに住むある女性も、彼女の個人的体験から、そのように考える。「離婚は、再出発する可能性です」と、この女性は言う。彼女は、最初の結婚は離婚に終わり、他の二つの関係も離別する結果となった。「時には、悪い相手と一緒にいるより、一人の方が良いと思います」と、彼女は、自らの結婚体験を振り返りながら話す。

「最初の結婚は、すべて法律に則ったものでした。結婚式、公証役場への届出、それから新婚旅行でした。すべては大体うまく行っていましたが、その後、彼が別な女性と親しくなり、隠れて関係をもつようになりました。彼との結婚は 4 年続き、幸いにも子供はいませんでした。その後、私は、後ほど私の二人の子供の父親となる別の男性と知り合いました。一緒に生活することに決めましたが、私たちは、決して正式に結婚することは考えませんでした。今度は、10 年経ったとき、別れることを決めたのは、私でした。理由は、決まり切った毎日と幻滅が、愛情より強くなってしまったからです。3 回目の関係は、もっと短く、一年半だけでした。私たちはあまりにも違っているのです、関係はうまくいかならなくなると気付いたので、私は、関係を切ることを決めました。今は、独身生活に戻っています。一人ですが、より平穏です」と、彼女は語る。

この問題の専門家たちは、関係の解消は、法的な離婚にせよ、離別にせよ、特に女性に

とっては引き続きひとつの保障であると、認識している。「多くの場合、合意の上での解消が、解決されていない危機と何かと衝突している時期の安定よりも好ましいのです。そうした時期は、家庭の日常生活が暴力で溢れているものです」と、心理社会学研究センター(CIPS)の2008年の研究、「新世紀を迎える時期のキューバの家庭」の著者チームは、書いている。

こうした意見に賛成している人びとは、夫に対する妻の経済的自立が、不満足な夫婦関係をより容易に終わらせるようにしていると考えている。

「女性だけでも、あるいはそうでなくても、家族の経済的基盤を支えることができることは、個人の自立の増大において重要なことです。今日、キューバ女性は、家庭を維持し、一家を扶養し、子供たちを教育し、家族に関することでも、家族に関しないことでも、決定することができます」と、パトリシア・アレス、マリア・エレナ・ベニテス両博士は、その論文「キューバの家庭—社会政策の新たな課題と試み—」において述べている。

家族構成の面では、結婚の破局によって、女性により取り仕切られる家庭と、より小さな家族が多く見られるようになっている。そこでは、片親だけ、通常は母親だけがいて、子供の面倒を見ていると、アレス、ベニテス両博士は指摘している。

また、結婚の破局は、家族関係や共同生活の持ち方の種類においても影響している。「そうしたいろいろな種類の家族関係や共同生活の中で、平均的なキューバ人は、誕生から死まで生きていく。また、結婚の破局は、時間の経過の中で獲得されたり、失ったりされる生物学的ではない家族関係の多様性にも影響している」。そしてそれは、「私の母親の連れあい」、「私の兄弟の父親」、「私の兄弟ではない、私の兄弟の兄弟」、「養祖母」、「継祖母」、または「元の連れあい1」などの呼び名の形式にまでも及んでいるのである。